Death

神か死神か

さてどうしようか。
試験を授けるのだという。
私は神と死神二つの資格があるのだという。
そもそも神になれるだなんて思っていないのだけれど。
そもそも人間として生まれたはずなんだけども。
しかし思い返せば、私は人間として生まれたはずなのに、育ててくれたのは骨男。
見慣れているので不思議と思わなかったが、人間の世界を散歩していると、それが異常なことだと気付いた。
骨の上に筋肉があり、その上に皮があり、血液が流れているのが人である。
私は見た目が人間そのものだが、今までしてきたことは、骨男にくっついて、来世を渡る川を渡る舟漕ぎの役割だったり、人とかけ離れたものだったかもしれない。
困ったな。
　この黒髪も白い肌も人間の特徴そのままなんだけれども？

骨男が私を連れ出した。
いつもは川のそばの小屋で寝ていて、起きれば舟を漕ぐ。
その役割を別人に託して、私は連れ出された。
川と反対方向へ歩き出すと、時空がゆがむ。
骨男の後ろにくっついて、白いローブをまとう。
『あれが見えるかな』
骨男が指をさす先には、ヨーロッパの街並み。
だがその一部が激しく燃え盛っている。
火事だね、石の家が多いこの国で、救急隊員すら近づけられないほどの日を発していて、それが遠くからでもよく見れとれる。
時々こちらへ向かって、大やけどを負った人間たちが歩きだしている。
舟に乗る人間のなかには、怪我をしていたりする場合があるが、あれは死者なのだという。
私は舟をこぎ続けてきて気付かなかったけれど、死神の役割を担っていたらしい。
『あそこに二人いるから、お前の選択をなさい』
すぐに近くまで下りてみる。
　人間のはずだが、やはり人間でないとわかったのは、他の騒ぎ出す人間たちの合間を縫って、家の中へ入っていくのを誰も止めないことと、熱さを感じないからだった。
一体私は何者だろう。

階段を上る。
ガラガラと音を立てて、色んなものが落ちてくる。ああ、天井は随分と崩れてきている。

　入った家には、子供を抱いた母親がいた。
周りは火が迫ってきて、煙を吸った赤子はぐったりしていた。
けれど、母親の方はまだ赤子より余力がある。

この人間にいかに力を貸すかで神と死神のどちらに近いか私は試されるらしい。
所で私はマリスと呼ばれている。
マリス=インヴァイトと名付けたのは骨男と呼ぶあの死神で、彼はデスという、死神正真正銘の名前がある。
ので、てっきり私は人間でありながら死神の位置にいるかと思っていた。
　そのまま訳すと、「悪魔を招く」だから。
よくこんな名前をつけたな、と、たまにデスに文句を言うと、デスははぐらかして逃げて見せていた。

火を通り抜けても、私のはおるローブは燃えることなく、二人の前に出ることができた。
一体この二人に何をしろというのだろう。
　しばらくせきこむ母親の後ろに立っていたが、することもないので、目の前に立ってみた。
この火事を止めろというのか、それともこの母親と子供をあの世に連れていくのか、それとも助けるのか、何をすればどう転ぶか一切を聞かされていない。
　ただ、分かったのは私はすでに人間ではないということだった。
通りでたまに散歩に出かけても、私を見る人たちがいないわけだ。たまにいても不思議そうな顔をする。そうこうするうちに、煙と火は強まる。
外から声が聞こえ、消火活動は進んでいるようだが、火の勢いはまだまだ広まっていく。
母親と子供は、一つの小さな部屋にいる状態。段々火の勢いで、そばにあった机、カーテンが燃え上る。
このまま放っておけば、二人とも死ぬだろう。

「あ、あなた…」
「？」
私の姿を見るなり、母親は、激しくせき込みながら、私に話しかけてきた。
私の姿は、この女性に見えるようだ。
「私の姿が見えるのか」
「幻聴、幻覚…？何でもいい、お願い、この子を…」
母親も弱り切っている。所々やけどを負っているが、逃げだせば何とか助かるだろう。火の勢いも私ならば止めることができる。
何となくそう思うだけであるが。
母親は、赤子を私に向かって差し出した。
ぐったりとした赤子に手をやると、受け取ることができた。

息を確認するが、この赤子はもう生きてはいない。
「その子を、助けてください…」
それを聞いて、おや、と思った。
息もしていない子供を助けろと無茶なことを言うこの人間と、自分の命より子供を優先する人間。
私の姿がはっきり見えていないのか、それでも子供を受け取る私を見て、母親は安堵に満ちた顔で、手を組んだ。
「神様、死神、でもいい、お願い、私の命でこの子が助かる、なら」
「助かるなら？残念ながら、この子は死んでいるみたいだ」
腕に抱いた赤子をもう一度確認する。
火傷こそはないが、煙を吸いすぎたせいで、もう息はない。心臓も止まっている。
この火事自体を止めて、この人間を助ける？
もしくは二人とも連れて行ってしまった方が楽かもしれない。
二人とも連れて行こうか。
そう思っていたところに、母親は手を組んだまま、倒れ込んだ。もうこの人間も長くはない。
「その子を、お願いします…」
この息のない赤子をどうしろと。
「一緒に赤子とこちらに来るか、二人とも来るか、それとも」
それとも…。
今まで見てきた人たちを思い出した。
舟に乗ってる最中、時々話しかけてくる人間がいる。
　その中に、随分と前に、三十代の女がいた。
その時の私は、姿かたちは子供。
私を見るなり、嬉しそうに話してきたことがあった。
『あのねぇ、私の子供に貴方にてるのよ』
何を言っているのかわからなかったが。
『雰囲気がね、昔死んだ子供に似ているの。なんだか懐かしい。私より先に死んでしまって、悲しかったわ』
聞き流していたが、次の言葉に興味を持った。
『私の命を与えられてその子が助かるならって、何度も教会と病院を行き来したものよ』
私は、それを聞いて返した。
　自分の命より、子供を優先するものかと。
女は笑いながら頷いた。
『大事な人との子ですもの。もう、あの子が死んで何年も経つけれど、やっと、あの子と同じ所に行けるのね』
嬉しそうに来世へ向かう舟の中で、喋り続けた。

「お願い、私の子を助けて、まだその子は、生まれて間もないの…」
腕の中の赤子を見る。
方腕に子供を、右手に、何をとるか。
右腕に何をとる？
二人とも助けるか、二人とも連れて行くか。
「お前の命でこの子供が助かるなら、どうする？」
助かっても、人間の世界で生きていくことは難しいだろうが。
死ぬことはない。
ならその先はどうなるのか、私ですらわからない。
　母親は、顔をあげて、涙いっぱいにためた目で、頷いた。
「ぜひ、ありがとうございます」
そうか、と、私は赤子を連れて帰ることにした。
最後に母親は一言いう。
「ありがとうございます、死神様…」
私は死神なのか。
気がつけば、右手に鎌を持っていた。その鎌を振りおろすと、彼女は息をしなくなった。
彼女から光の球が一つ出て、それを赤子に押し込んでみた。
赤子は、ひく、と、手を動かして、泣きだした。
あまりにもうるさい泣き声だが、不思議と心地いい。
　そして来た道を返す。振り向くと、女は手を組み、喜びに満ちた顔で死んでいた。

『これは困った方法をとりましたね』
帰って来た私を見るなり、デスは首をかしげた。
小屋の中、赤子は泣きやまず、そばにいた羽の生えた女に渡した。
女が上手にあやすと、赤子が泣きやみそうになる。
『子供を助けて、母親を殺しましたか』
「子供を助けろといわれたので、その通りにした」
女は後ろで、デスに耳打ちする。
女は金色の羽が美しい、所謂天使に入る。
　神々しいまでの羽の色が、そのあかしである。
『ですがその姿はもう私たちと同じですねぇ』
鏡を、と、小屋に立てかけてある鏡を見た。そこにはいつもの私の姿と白い衣装、その後ろに黒い鎌がくっついている。
『立派な死神の仲間ですね』
「人間だと思っていたのだが」
うーん、確かに鎌がいつの間にかついている。
『まあ、その姿ですから、死神確定ですね。一人前の死神おめでとうございます』

なんだか素直に喜べないな。
　赤子は女の手の中で、すうすうと眠りだした。
「ありがとう、疲れたから寝る」
あの赤子はどうなるのだろう。
ここはあの世とこの世のはざま、ここで生き続けるのか。
『ではではおやすみなさい』
デスは、赤子を連れた天使と共に小屋を出た。

デスは、眠りについたマリスを見やると、ため息をついた。
『同じ道をたどりましたねぇ』
赤子を、骨の手で小さく撫でてやる。
『少しでも覚えてるのでしょうか。それとも無意識にしたことなのでしょうか』
二十年は前の話になるだろう。
デスが、マリスをよこしたあの街に行った時も同じだった。
二十年前は今ほど進んでいなくて、家や草はらを焼いていくスピードが速い割に、火を消すまでに随分と時間がかかっていた。
　随分死者が来ると思ってみてみれば、火事が起きていた。
その時は各地で火災が発生していて、なんとなくのぞいてみたのがそこだった。
鎌をかついで、降りて行き、そこで見たのは、火に包まれて泣き叫ぶ、二歳程度のマリスと、それを守るように抱きかかえる母親。
そのうちこの二人も来るだろうと見ていたが、彼女にはデスの姿が死神としてはっきり見えていて、泣きながらマリスを抱き渡してきた。
名前を聞いていないが、彼女から渡された時、彼女は『マ』のつく文字を発音したので、そのまま連れて帰ってマリスと名付けた。
　しかしマリスはこの世界に来る直前、死んでしまった。
残念残念とその時は笑ったが、マリスが息をしないのを見た母親は、自分の命と引き換えに、と言ってきた。
そこでそのまま命を吹き込んで、ここに連れてきた。
つまりマリスは体は人間でも、死んだ魂と生きた魂を持った、新しい生き物になった。
だからあの世とこの世を行ったり来たりできる。
　あの時と全く同じ行動をとったマリスに驚いたが、母の愛というものを知った。

『ですが、あのあと不思議なんですよねぇ』
デスは赤子の頬をつつきながら、首をかしげた。
その後母親はここにもどこにも来ていなかった。転生したとも聞いていない。
と、思っていたら、数年前にやっとここに来た。
　彼女はここに来るまでに時間がかかったのか、それとも命を渡したのにまた助かったのかなん

なのか。
舟に乗る、当時より少し老けた彼女を見た。
つり橋の上から耳を澄ませば、マリスの顔を見て、表情が和らいだ彼女は、昔話をしだした。
　マリスはあまり興味なさそうに舟を漕いでいたが、嬉しそうに語る彼女が話していたことはこうだ。
『雰囲気がね、昔死んだ子供に似ているの。なんだか懐かしい。私より先に死んでしまって、悲しかったわ』
それを聞いて、おや、と思った。
　気になってそのまま聞いてみれば、当時マリスを預かった時と同じシチュエーションで、子供をなくしていた。
『死神様が、私の子供をどこか安全な所に連れて行ってくれたのかしら。そんな夢を見たのよ』と、話す彼女は、確かに当時マリスを預かった彼女だった。
『火事で死んじゃったと思うけど、遺体が見つからなくてね…そのあとも調べたけど、子供見つからなくて…。助けたという情報も出てこなくて。どこかで生きててくれればと思ったけど、きっと無理ね。死神様を見ちゃったんだもの。連れて行かれちゃったのね』
マリスは彼女が母親ということに気付いたのだろうか。
　何度か頷いていたようには見えたが、来世に向けて漕ぎ続ける船は、霧の向こうに消えた。
『と、いうことがありました』
天使はなるほど、と頷いて赤子を抱いたまま喋り出した。
『あらあらそれじゃあ、もしかしたら入れ違いで私たちに生き返されちゃったかな？どちらにしても、マリスの取った行動でまた新しい子が来ましたね』
『そうですねー。名前何にしましょうか。まだまだ赤子なので、そちらで育ててくれると嬉しいです。私実は子供苦手なんです、ハイ。マリス育てるだけでも大変でした』
赤子は腕に抱かれて眠ったまま、天使によって連れて行かれた。
ひらひらと、飛んでいく彼女をハンカチを振って見送る。

そういえば、マリスに、名前の由来を知られた時に、とても怒られた。
不吉な名前すぎるといわれたが、デスの精いっぱいの愛情だった。
育てるにあたって体が人間なので、人と同じ食料は必要で、せっせと育てるデスの姿に心打たれた仲間たちが、人間の食料を持って来てはあやして、を繰り返した。
特に天使たちは大喜びで可愛がって、マリスは天使たちに囲まれながら、デスの仕事を始めるということをした。
　そのせいか自分の生い立ちにも特に興味もなく、川を行き来する仕事も、死んだ人間ばかり来ることも疑問に思わなかったようだ。
『まあでもマリスももう大人ですし。これで一人前の死神ですねー。さーて、少し休んだらまた仕事仕事』
小屋に入っていくと、マリスが一仕事を終えて、寝息を立てていた。その髪を軽く撫でながら、

デスは笑った。

終